

日本グループ・ダイナミクス学会会報

JGDA

ぐるだいい ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第 56 号

発行所：立正大学心理学部 西田公昭研究室

日本グループ・ダイナミクス学会

E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

(2019年12月27日)

発行人：西田公昭

編集担当：杉浦淳吉

※2020.6.2 p.12「複数部門の連覇も可能」の項目において赤字部分修正

訂正 優秀論文賞の対象年度の表記に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
誤) 2019年度 正) 2018年度 (2021.3.22訂正)

目次

★ 第 66 回大会後記	2
★ 第 66 回大会参加記	3
★ ¹⁸ 2019 年度 優秀論文賞	5
★ 2019 年度 優秀学会発表賞	6
★ 事務局からのお知らせ	11
★ グルダイ学会関係連絡先	14

★★★ 第 66 回大会後記 ★★★

大会準備委員会 事務局長
黒川光流 (富山大学)

日本グループ・ダイナミクス学会第 66 回大会 (学会長兼準備委員長曰く「きときと学会」) を、10 月 19 日、20 日の 2 日間にわたり、富山大学五福キャンパスにて開催いたしました。大会 1 週間前の台風の影響による北陸新幹線の運行休止などがございましたが、北陸・富山での初めての大会を開催することができました。例年並み、とまでは申せませんが、ある程度の規模での大会を開催することができたのではないかと考えております。

準備委員会事務局長として当日の大会運営全般に関わっていたため、すべてのセッションについて、じっくりと拝聴することは叶いませんでしたが、口頭発表、ポスター発表、ワークショップ、いずれのセッションでも熱心な意見交換がなされていたことが窺われました。常任理事会が兼ねている準備委員会による企画シンポジウムは、「“ネット民”という集団のダイナミクスを探る」というテーマで開催いたしました。高史明先生 (神奈川大学) からは「偏見・差別から見るネット社会のダイナミクス」について、笹原和俊先生 (名古屋大学) からは「エコーチェンバー化する SNS の計算社会学」について、寺口司先生 (大阪大学) からは「炎上から捉える『ネット社会』」というテーマについて、それぞれに興味深い話題提供をしていただきました。三浦麻子先生 (大阪大学) ならびに村本由紀子先生 (東京大学) による指定討論、そしてフロアを交えた議論は、時間が足りなくなるほど充実したものであったように思われます。初日午後のポスターセッションでは、昨年に引き続きコラボ・リクエスト企画として、原子力安全システム研究所、日本脱カルト協会、そして金沢市議会議員の方に研究の提案をしていただきました。多くの方々が足を運んでくださり、共同研究の可能性が活発に議論されておりました。

初日夜の懇親会は、大会会場からは少し離れ、その後の移動にも便利な富山駅近くで執り行いました。乾杯のご発声は名誉会員の木下富雄先生にいただきました。また、幾人かの先生方からはお酒を差し入れていただきました。大会会場とは違った雰囲気でも、楽しく交流していただけではないかと思えます。懇親会のお食事には、白エビや黒部名水ポークなど、富山ならではの食材を使った料理をお願いしておりました。懇親会の料理だけでなく、総会のお弁当や休憩室のお茶請けにも、きときと学会としての富山らしさを意識いたしました。お気づきいただけましたでしょうか。

2 日目の午前中には、「GD 学会のむかし・いま・これから」と題して、木下富雄先生に特別講演をしていただきました。写真はそのときの様子です。最近接領域の学会の 1 つである日本社会心理学会との対比を通じた興味深いお話は、学会の歴史を学び、今後の学会のあり方を考える際の良い刺激になったのではないのでしょうか。

いくつかのミスやトラブルはございましたが、大事なく大会を終えることができました。2 日間の大会の期間中、不行き届きのことも多かったと思いますが、皆様にはいたわりと感謝のお言葉をいただきました。また、前回大会開催にご尽力された大坪庸介先生、石井敬子先生からは、大会の準備・運営に関しまして多くのご助言をいただきました。加えて、大会担当の相馬敏彦先

生をはじめ、準備委員をお務めくださった常任理事の先生方にも開催を支えていただきました。もちろん、当日のお手伝いをしてくれた学生スタッフの力がなければ、無事に大会を終えることができなかつたのは言うまでもありません。大会に関わってくださったすべての皆様に改めて深く御礼申し上げます。最後になりますが、来年度の帝塚山大学での大会も盛会となりますことを、心よりお祈り申し上げます。



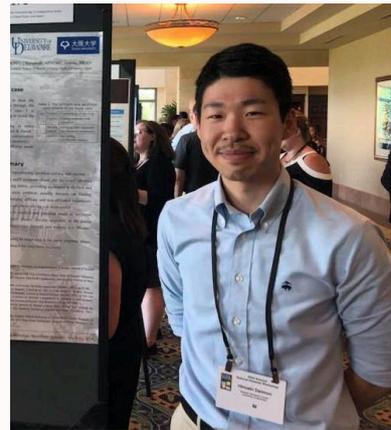
木下富雄先生による特別講演

☆☆☆ 第 65 回大会参加記 ☆☆☆

● 大門 大朗 (京都大学)

相次ぐ台風、日本各地での洪水被害……被災者中心の実践研究を差し置き、学会に向かう後ろめたさを感じつつ、被災地に思いを馳せながら大会会場である富山大学に辿り着きました。光栄にも今回参加記を執筆させていただくことになりましたが、今回わたしが印象に残った自身の発表のセッションに絞ってご紹介したいと思います。

わたしの口頭発表は、人びとが助け合おうとする際に生じてしまう「お世話になってしまう」という負い目（負債）のポジティブな面を捉え返し、被災地から被災地へ支援が連鎖されていくという面を主張した研究でした。実験室実験には疎かったこともあり、その他の先生へどのようなコメントができるか、はたまた返ってくるか、非常にドキドキしながら、初めての座長としてセッションに参加していました。実際、座長は、杉浦先生にほとんどサポートしていただく形になりましたが、想像を超える多くの先生方からコメントを頂いたことが印象的でした。国際的にも負債感とは日本独特なのか、被災経験のある人が支援すること効果はどうなのか……コメント頂いた先生からの受け売りですが、「実験室実験的な研究と実地での研究とが結びつく機会がある点がGD学会の良い点である」実際に、そのことを強く感じた第66回大会でした。より広くインパクトのある研究と何なのか、様々な視点から「GD学会のこれから」を見つめ直す、刺激的で実りある学会大会になりました。



● 磯部 智加衣（千葉大学）

日本グループ・ダイナミクス学会第66回大会（2019年10月19・20日開催）は、さまざまな点で私の記憶に強く残る学会となりました。

今大会一週間前、台風19号が日本に甚大な被害をもたらしました。被災された方々には心よりお見舞い申し上げます。この台風により、北陸新幹線が一部不通となり、それに伴い飛行機も一時満席となりました。そのため、直前に富山までの往復に悩むことになりました。

大会の初日の受付では、学生さんや大会準備委員長の黒川光流先生だけでなく、常任理事の先生方が大会準備委員としてずらりと笑顔で出向かえてくださいました。基調講演では、木下富雄先生が、グループ・ダイナミクスとは何か、学会の歴史についてお話くださいました。中でも他分野に跨って研究を広げていくことが重要である、そのためには他分野の知識を勉強しつづけることが大切であるというお話、また学会を『知的好奇心の満たされる場に』というメッセージが印象的でした。今大会の参加者は、交通事情等により例年よりも少ないように感じましたが、ポスター発表の会場では混み合うことなく各発表をじっくり伺うことができ、満たされた気持ちになりました。

何よりも、準備委員長がこの学会をほぼお一人でご準備されたことに頭が下がる思いです。シンポジウムの企画などは常任理事の先生方がなさったと伺いましたが、それでもご準備は大変だったと思います。大会中、参加前の大変さを忘れ、とても快適に過ごさせていただきました。参加できてよかったです。本当にお世話になりました。

受賞者の声

宮島健・山口裕幸 (20¹⁸~~19~~)印象管理戦略としての偽りの実効化：多元的無知のプロセスにおける社会的機能
(第 58 巻 1 号所収)

この度は伝統ある日本グループ・ダイナミックス学会の大変名誉ある賞をいただき、身に余る思いでございます。また、本研究の遂行にあたって、ご指導くださった山口裕幸先生と研究室の皆様、この場を借りて深く御礼申し上げます。

本研究は、日本の男性による育児休業の取得率が低迷している現状の背景に、「多くの人々は男性による育休の取得を好ましく評価していながらも、世間一般の人々は反対に男性の育児休業に対して否定的なのだろう」という集合的な思い込み（多元的無知）が生じていることを指摘したうえで、そうした誤った思い込みに陥っている人々が、育休の取得を希望する男性に対する非難をしてしまうのは、いかなる心理過程によるのかを検討したものです。本研究結果から、自身が他者に与える印象をうまく管理するために、「男性による育児休業を好ましく評価する」という自身の態度とは相反しながらも、知覚された他者の態度（i.e.、世間一般の人々は男性による育児休業を好ましく思っていないだろう）に合わせた（つमりの）戦略的な行動として、育休取得予定の男性に対して、それを思いとどまるようにはたらきかける、という心理過程があることが示されました。

本研究は、多元的無知が関連するトピックの探索に注意が向きがちだった点を反省し、理論的發展に少しでも貢献できる研究をせねばと大学院博士後期課程のときにスタートした研究です。場面想定法という手法を用いており、方法論的な弱さを認めざるを得ませんが、社会的な関心が高まっている現実の社会問題を題材に、多元的無知という興味深い現象を扱った点を評価していただいたのではないかと感じております。今回いただいた結果に慢心することなく、これからも学術的意義と実践的意義の両輪を強く意識しながら、研究に邁進していきたいと思っております。

最後になりましたが、お忙しい中、前向きで建設的なコメントをくださった査読者の先生方、そして、本論文をご推薦くださった選考委員の先生方に深く御礼申し上げます。特に査読者の先生方は、研究や業務で大変お忙しい中、極めて迅速にご対応くださり、深謝いたします。当時、博士後期課程に在籍していた私にとって、博士論文の要件を満たすための査読論文の審査を迅速に行っていただけたことは、非常に幸運なことでした。本当に感謝しております。ありがとうございました。



コメント：宮島健（奈良大学）

選考結果のご報告

2019 年度 優秀学会発表賞 選考委員長

相馬敏彦 (広島大学)

2019 年 10 月 19 日、20 日に富山大学で開催された日本グループ・ダイナミックス学会第 66 回大会において、「2019 年度優秀学会発表賞」の選考が行われました。

審査過程につきましては、優秀学会発表賞選考規程に沿って次の手順で進められました。論文集原稿を対象とした事前審査では、部門ごとに理事全員による投票が行われ、各部門上位 3 名 (3 発表) が選出されました。その上で、当日に行われる二次審査では、理事もしくは理事会の委嘱を受けた 3 名の審査者がそれぞれの発表を聴き、内容とプレゼンテーションを各 5 点で採点しました。最終的に、一次審査の投票数 (1 票を 1 点とカウント) と二次審査の採点を加算する方法で候補者を決定しました。その結果、今年度の同賞は、以下の発表における第一発表者の方々に授与されることが決定いたしました (敬称略)。

< ロング・スピーチ部門 >

- 第一発表者：前田 楓 (安田女子大学大学院)
- 発表題目：「障がい観」の可視化とその変化を促す手立てに関する検討
- 共同発表者：橋本 博文 (安田女子大学)、佐藤 剛介 (高知大学)

< ショート・スピーチ部門 >

- 第一発表者：谷辺 哲史 (東京大学大学院、日本学術振興会)
- 発表題目：自動運転による事故とメーカーへの責任帰属
- 共同発表者：唐沢 かおり (東京大学)

< English Session 部門 >

- 第一発表者：鈴木 啓太 (東京大学大学院 人文社会系研究科)
- 発表題目：“You will never know unless you try hard”: When entity theorists value effort
- 共同発表者：村本 由紀子 (東京大学)

< ポスター発表部門 >

- 第一発表者：阿部 夏希 (広島大学大学院、日本学術振興会)
- 発表題目：過剰適応の規定因を探る：ランダムフォレスト法による検討
- 共同発表者：中島 健一郎 (広島大学)

受賞者の皆様、おめでとうございます。受賞者は、受賞した内容に関する論文を第一著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を有し、「特集論文」に準じて主査および副査1名で審査を受けることができます。ただし、投稿の権利は受賞発表日（2019年10月26日）から1年間に限って有効です。

受賞者の声

<ロング・スピーチ部門>

前田楓・橋本博文・佐藤剛介

「障がい観」の可視化とその変化を促す手立てに関する検討

この度は名誉ある賞をいただき、大変うれしく思います。審査をしてくださった先生方、発表の際に貴重なご意見をくださいました先生方に、心より感謝申し上げます。

今大会の発表では、インクルーシブ教育に対する人々の態度に関するデータを報告しました。インクルーシブ教育の理念をはじめて学んだとき、私は正直なところ、「本当に実現できるの?」と思いました。障がいのある人の社会的包摂はいまやグローバルスタンダードとなり、日本においてもそうした潮流を感じるのは確かですが、学校教育現場の現状に鑑みますと、インクルーシブ教育の導入や推進は現実的とは言い難いと感じます。実際、私たちが行ってきた調査研究によれば、大学生も、一般成人も教員も、また障がい当事者も、インクルーシブ教育の実現可能性を低く見積もっていることが示唆されています。私自身が今考えているのは、インクルーシブ教育に対する消極的な態度はなぜ生まれ、そうした態度を変化させるためには何が必要か、という問いです。現時点でわかっていることは、障がいの原因を障がいのある人の機能的欠損（インペアメント）に求める従来の個人帰属モデル（医学モデル観）に基づく考え方は、インクルーシブ教育に対する消極的な態度につながる可能性があるということです。また、障がい当事者の努力が必要であることを強調すると、人々の医学モデル観が高まる可能性があることもわかっています。これらの結果から、障がいの問題について、その当事者たちが努力する必要があるという事実を強調しすぎることは、場合によっては医学モデル観を高め、その結果として、障害のある人の社会的包摂の推進を難しくさせてしまうという可能性も考えることができます。これらの知見が持っている意味について深く考えながら、上述した問いに対する答えを見出していくことが今後の課題です。

インクルーシブ教育に対する消極的な態度を規定する心理・社会的な要因を一つ一つ明らかにしていく作業は、インクルーシブ教育の導入や推進の一助となりうるだけでなく、グローバルな



社会を生きる日本人にとって少なからずの抵抗感が予想される「多様性への寛容さ」を考えるうえでも示唆に富むと私は考えています。この度の受賞を励みに、なお一層研究に邁進し、インクルーシブ教育の導入や推進の足枷となる要因を一つ一つ取り除くための手立てについて、考察を深めていきたいと思えます。

コメント：前田楓（安田女子大学）

<ショート・スピーチ部門>

谷辺哲史・唐沢かおり

自動運転による事故とメーカーへの責任帰属

このたびは名誉ある賞を頂き、大変光榮に存じます。選考委員の先生方、大会当日に貴重なコメントを下された先生方に心よりお礼申し上げます。

人工知能開発の進展により、意思決定を機械任せにできる範囲は今後拡大していくと考えられます。それに伴い、特定の意思決定者がいなくなることで責任の所在が不明確になるという問題が指摘されています。この問題に対して本研究では、自動運転車による事故を題材として、架空の交通事故のシナリオに基づいて責任を判断してもらうという方法で研究を行いました。本研究では自動車メーカーに対する責任帰属を「事故を起こしたことに對する責任」と



「事故の被害を補償する義務」に分けて測定したところ、前者はメーカーに対する原因帰属のみによって促進される一方で、後者は人工知能に対する原因帰属によっても促進されるという結果が得られました。つまり、人々は事故が起きたのは誰のせいかという「犯人捜し」的な責任と、起きてしまった事故に対処する義務や役割という意味での責任を切り分けて判断しており、メーカーは人工知能の判断に対して後者の意味で責任を帰属されるようです。

本研究はまだ存在しない水準の先端技術を題材としており、架空のシナリオに基づく判断しか検討できていないという大きな限界があります。とはいえ、実用化以前の段階から社会的影響にも目を向けた研究を行っていくことで、今後実現する技術がスムーズに社会に受け入れられていくための一助になるのではないかと思います。今後は工学や法学領域の研究者とも協力しながら、より現実に起こりそうな問題に焦点を当てた研究を進めていく必要があると考えています。

不十分な点が多く残る発表ではありましたが、発表会場では（そしてその後の懇親会でも）先生方から厳しいご指摘とともに、今後の研究を面白く展開していくヒントを頂くことができました。この場を借りて感謝申し上げます。これからも引き続きご指導を賜りますようお願いいたします。このたびは誠にありがとうございました。

コメント：谷辺哲史（東京大学）

< English Session 部門 >

鈴木啓太・村本由紀子

“You will never know unless you try hard”: When entity theorists value effort

この度は大変名誉ある賞に選出いただき、大変光栄に存じます。選考委員の先生方並びに発表の場にて貴重なコメントをくださったみなさまに心から感謝申し上げます。

私は研究テーマとして、暗黙理論と呼ばれる能力の可変性に関する信念を扱っています。近年では教育心理学やポジティブ心理学などの領域で「マインドセット」呼ばれることの方が多く、そちらの方が耳なじみのある方も多いかもしれません。

本研究では、困難に直面した他者に対するフィードバックが暗黙理論 (Implicit Theories) によってどのように異なるかを検討し、努力を重要視しないとされてきた実体理論者 (能力は固定的であるという信念を持つ人) も、他者が投入した努力量によっては必ずしも努力を軽視するわけではないことを明らかにしました。具体的には、実体理論者が困難に直面した他者に対して「他に向いている課題がある」とアドバイスするのは、その他者が十分に努力した場合のみで、他者がまだ十分に努力を行っていない場合には、増加理論者 (能力は可変的であるという信念を持つ人) と同じ程度、今の課題で努力を続けることを求めるという結果が得られました (まるで “You will never know unless you try hard!” と言っているかのようだと思います)。

暗黙理論研究では、概して増加理論を持つことが望ましいとされています。それを前提とした応用研究が関心の中心であり、理論研究の勢いはかつてのものほどではなくなっています。しかし近年、増加理論を持たせるための介入 (努力で成功した話を聞かせる、成長可能性を示す科学データを示す等) が長続きしないこと、増加理論を持つことが必ずしも (学業などで) 良い結果をもたらすとは限らないことが明らかになってきています。こういった現状を踏まえると、増加理論者・実体理論者の性質をより精緻に解明しようとする理論研究の必要性は高いといえます。暗黙理論の性質がより精緻に解ることによって、「そもそも望ましい介入とは何か?」「説得や心がけではなく、ある暗黙理論を持つことのメカニズムはどのようなものか?」といった議論が可能になります。本研究は、どちらかという実体理論にフォーカスを当てた研究になりましたが、そういった点で貢献できないかというモチベーションで進められてきました。その目標が多少なりとも達成されているならば嬉しい限りです。

最後になりますが、この研究は多くの方の協力はなしには実施できませんでした。実験に参加くださった方々、様々なアドバイスをくれた研究室の先輩後輩含む友人たち、そして温かく指導してくださった村本先生に改めて感謝申し上げたいと思います。この賞を励みに今後とも労働と学業に勤しみたいと思います。この度は本当にありがとうございました。



コメント: 鈴木啓太 (東京大学)

<ポスター部門>

阿部夏希・中島健一郎

過剰適応の規定因を探る：ランダムフォレスト法による検討

この度は大変名誉ある賞を頂きありがとうございます。大変光栄に存じます。選考委員の先生方、そして、発表の際に貴重なコメントをくださった先生方に心よりお礼申し上げます。

内実を申し上げますと、指導教員から「ランダムフォレスト法についての発表は、あまり受けが良くないかもしれないね。内容も臨床心理学領域にあたるものだし…」と言われていたので「来てくださる方は少ないかもしれないな」と思っていました。それが予想以上の方に来ていただき、さらに発表賞までいただけることになり、本当に嬉しく思っております。指導教員は「さすがこの学会の裾野の広さよね」と言っていました。私もそう思います。学会のみなさま、そして関係のみなさま、本当にありがとうございました。



本研究は、過剰適応を高群と低群に分類したとき、どのような要因が分類における重要な変数となっているのかをランダムフォレスト法を用いて検討したものです。先行研究において、過剰適応は、抑うつやストレスなどの不適応と関連しているだけでなく、自殺や不登校など社会問題にもつながっていることが明らかになっています。臨床的な介入を行うにあたって重要なのは、健常群と疾患群の分類に寄与している変数を明らかにすること、すなわち、疾患群が持つ特徴を明らかにすることであると言われていました。これを踏まえると、過剰適応高群と低群の判別に寄与している変数を明らかにして、その変数の重要度を示すことは、過剰適応の緩和や抑止のための介入研究を進めていくために重要だと考えました。今回の研究では、過剰適応高群と低群の分類において最も寄与している変数は Fear of negative evaluation (FNE) であることを明らかにしました。

過剰適応高群に位置づく人々は、そうでない人々と比べると FNE が非常に高いというこの結果は、過剰適応を緩和・抑止するための介入において、FNE を低減するようなアプローチが有効である可能性を示唆していると言えます。今後は、大学生以外のデータに対して同様の方法を用いた検討を実施し、本研究の知見の一般化可能性を探ることが課題であると考えています。

当日の発表では、私の知識不足や拙い説明を先生方に補っていただくなど多大なご助力を賜りました。そして、今後の分析をするにあたって重要な示唆を数多くいただきました。この場を借りて厚く感謝申し上げます。先生方からいただいたコメントをもとに研鑽を重ねて参りますので、今後ともご指導のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

コメント：阿部夏希 (広島大学)

次年度大会について

次期大会は下記の通り開催されます。併せて下記のコラムも、是非ご一読ください。

開催場所 帝塚山大学 奈良・学園前キャンパス

開催日時 2020年9月3日(木) - 4日(金)

大会委員長 水野邦夫 (帝塚山大学心理学部心理学科・教授)

優秀学会発表賞への道

グルダイ学会に「優秀学会発表賞」が設けられて10年以上が経ちます。徐々に周知されつつある一方、あまり知らない新入会員の方もいらっしゃるようですので、改めてルールを説明させていただきます。ただ、(この原稿に割ける私の)時間もあまりないので、ここでは簡単にその特徴だけかいつまんで説明させていただきます。詳しくお知りになりたい方は、ぜひ本学会の優秀学会発表賞選考規程 (http://www.groupdynamics.gr.jp/award_presentation.html) をご覧ください。

■ 賞を得ることの重要性

履歴書にはたいがい「賞罰」欄があります。この欄の「賞」に書くことがないという人も少なくないのではないのでしょうか。若手研究者にとってアカデミックポストを得ることが困難になるなか、賞欄に記載できることが多いことはポストを得る上でもアドバンテージになることでしょう。このアドバンテージに接近する第一歩として、本学会での優秀学会発表賞へのエントリーを利用してください、というのがこのコラムの主旨です。

■ 自信のある研究で賞を狙おう！

賞を得るためにも、ぜひ自信のある研究を本学会で発表してみてください。エントリーした人は「事前投票および発表審査の得点を勘案して、発表部門ごとに最も評価の高かった発表を優秀発表として決定」される選考を経ることになります。事前投票をクリアするには原稿の内容が重要です。イメージをつかむには、過去の受賞発表を参考にしてもよいかもしれませんが、ただし、学会当日の発表(プレゼンテーション)も重要な選考基準になります。見方を変えれば、事前投票では僅差で負けていても、発表での逆転が可能です。

■ この世界に入りたての人だけの特権

チャンスはいつまでもあるわけではありません。優秀学会発表賞にエントリーできるのは、「第1著者である発表者が、発表時点において大学院在学中の者、または大学院修了後(退学後)5年以内の者」だけです。該当する研究者はチャンスを逃さないようにして下さい。年齢制限はありませんので、社会人院生の方も条件を満たせば歓迎です。また、エントリーできる人が限られるということは、賞をめぐる、ベテラン研究者とは競合ないという利点もあります。

■ エントリーボタンをぼちるだけ！簡単エントリー

エントリー手続きは意外に簡単です。大会発表申し込みの際に、自らエントリーの意向を問うボックスにチェックするだけです。ただし、くれぐれも、エントリー前に資格を満たしているかどうかをご確認ください（ボックスにチェックをつけていても、資格のない方は審査対象になりません）。

■ 複数部門の連覇も可能（四冠王には未だ誰も到達せず） ※2020.6.2 赤字部分修正

既に受賞したことのある方は、エントリーできない？そんなことはありません。確かに規定には「すでに本賞を受賞した者は、同一の発表部門においてはその選考対象としない」とあります。裏返せば、同一でない発表部門では選考対象となります（もちろん、既述のエントリー資格を満たす必要はあります）。実は、これまでの異なる部門でエントリーして複数回受賞された方は7名いらっしゃいます。いずれも二冠王（二回）か三冠王（三回）です。四部門で受賞する四冠王があらわれれば、若くして学会のレジェンドになれることは間違いありません（主観です！）。

■ 受賞すると論文審査でも優遇あり

受賞すると、実験社会心理学研究の審査手続きで「編集委員会は、「特集論文」に準じて、主査および副査1名で審査を行う」こととなります。つまり、通常の投稿論文よりも審査期間が短くなりやすく、論文掲載のチャンスが広がります。

大会担当常任理事 相馬敏彦（広島大学）

実験社会心理学研究 2019 年度 59 巻 2 号 —— 掲載予定論文

（2019 年 2 月発行予定／早期公開済み）

原著論文

■ 松本祐馬

- テキストベースの討議が個人の態度変容に与える影響
—— ベイジアン ANOVA による平均値の比較 ——

■ 酒井明子・渥美公秀

- 東日本大震災後の被災者の心理的回復過程 —— 震災後 7 年間の語りの変化 ——

■ 堀口康太・御手洗尚樹

- 再雇用高齢労働者の就労働機づけ尺度の作成および関連要因の検討

Short Note

■ Sumin Lee, & Ken'ichiro Nakashima

Do shift-and-persist strategies prompt the mental health of low-socioeconomic status individuals?

■ Keiko Ishii

When people avoid a product chosen by others:

The effects of need for uniqueness and the presence of others

■ Haruka Shimizu, Kazuaki Abe, & Ken'ichiro Nakashima

The effects of cognitive strategies on behavioral intention toward strangers:

A conceptual replication of Shimizu, Nakashima, and Morinaga (2016)

上記6編と以下の論文が早期公開されています。

■ Keita Suzuki, Tomoya Yoshino, & Yukiko Muramoto

The effects of a selection system and implicit theories on individual effort

編集長コメント

2019年10月19日の総会でお示ししたとおりに、「実験社会心理学研究」の書式が一部変更されます。この改訂は、来年度に刊行される第60巻より適用となります。本誌に今後ご投稿される方、また現在改稿中の方は、ご留意くださいますようお願い申し上げます。

改訂されたのは引用文献に関する部分で、「心理学研究投稿の手引き」に準じるように書式が改められました。具体的には、以下のとおりです。

■ 本文中に文献を引用するとき、著者が6名以上である場合は、初出の際も2度目以降も第1著者名以外は“et al.”と略記する。(改訂前：省略表記なし)

■ 引用文献リストにおいて、著者が8名以上の共著論文については、第1から第6著者まで書き、途中の著者は“...”で省略表記し、最後の著者を書く。(改訂前：省略表記なし)

■ 引用文献リストにおいて、各巻通しページ付き論文については、誌名と巻数をイタリック体で記す。(改訂前：巻数はボールド体)

これらの変更は、国内の心理学関連各誌の多くが採用しているスタンダードな書式に則ることによって、本誌への投稿を検討している方々への利便性を高めることを目的としたものです。みなさまのご投稿を心からお待ちしております。

☆☆☆ グルダイ学会関係連絡先 ☆☆☆

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等の変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどの配信先の登録・変更・停止等の連絡先として、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミクス学会 事務支局
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷 (株) 学会フォーラム内
TEL : 075-415-3661
FAX : 075-415-3662
E-mail : jgda@nacoss.com

学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミクス学会本部事務局
〒631-8502 奈良市山陵町 1500
奈良大学社会学部 西道実 研究室
TEL : 0742-44-1251 (代表)
E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

投稿論文・学会誌編集関連【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミクス学会 編集事務局
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷 (株) 営業部編集校正課内
TEL : 075-441-3155
FAX : 075-417-2050
E-mail : jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp

広報関連【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、 新刊案内や研究会案内等のニュース記事、書評、公募情報など】

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45
慶應義塾大学文学部 杉浦淳吉 研究室 (広報担当 常任理事)
※ 鶴子修司 (広報補佐員)

E-mail : office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。

(マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください)